

# 浄泉寺・成願寺同朋の会研修会

日時：平成 27 年 2 月 8 日

場所：鳴子観光ホテル

## 内 容

開 会：真宗宗歌斉唱

あいさつ：住職

講 話：まは、さてあらんⅡ

・明日ありと思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものかは

親鸞 9 歳のとき出家を決意し天台宗座主である慈円を訪ねた折、夜も遅いことから「得度はあすにしましょう」と言われたところ、親鸞は「明日までは待てない」意味でこの時詠まれたもの。

・寒くとも袂に入れよ西の風 弥陀の国より吹くと思へば

親鸞 3 5 歳のとき越後居多ヶ浜に流罪となった時冬の浜辺で詠んだもの。

また別の説としてあるのは。

ある雪の日に親鸞一行が道に迷い、その地の日野左衛門に一夜の宿を求めたが断られ、雪の中で石を枕に夜を明かした時に詠んだもの。

いずれも「阿弥陀如来からお受けした大きなご恩を思えば物の数ではない」との意。

・雑行を捨てて本願に帰す

教行信証の後序にある「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」。

(『註釈版聖典』 4 7 2 頁)

【逸話】親鸞 4 2 歳、関東に向かう途中、ある村で「亡くなった村人のためにお経をあげてほしい」と頼まれ、一時は浄土三部経を上げるかと思ったのだが、本来お経は死者にあげるものではないこと、そして「南無阿弥陀仏」を唱えることでよいことを基に、村人の求めには応じず旅を続けることになった。

・ただ念仏して弥陀にたすけたもうべし ←法然上人

ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべし ←親鸞聖人

法然上人の教えにただただ感服し、念仏のみが教えの中核をなすことを詠んだもので、「正しい行いをせよ」とも「正しい知識を持て」とも言わず「念仏することによるのみ生きよ」との教え。

### 参考（和讃）

他力の信心得るひとを うやまいおおきによるこべば

すなわち わが親友（しんぬ）ぞと 救主世尊はほめたもう

(『真宗聖典』 6 2 8 頁)

よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを

善悪の字しりがおは おおそらごとのかたちなり

(『真宗聖典』 5 1 1 頁)

### それはお前に丁度よい

お前は お前で 丁度よい  
顔も身体も名前も姓も お前にそれは丁度よい  
貧も富みも 親も子も 息子の嫁も その孫も それはお前に丁度よい  
幸も不幸も喜びも 悲しみさえも 丁度よい  
歩いたお前の人生は 悪くなければ良くもない お前にとって丁度よい  
地獄へ行こうと 極楽へ行こうと 行ったところが丁度よい  
うぬぼれる要（よう）もなく 卑下する要もない 上もなければ 下もない  
死ぬ月日さえも丁度よい 仏さまと二人連れの人生 丁度よくないはずがない  
南無阿弥陀仏

恩徳讃斉唱

閉会（以降懇親会）

### 研修会写真集











